

奏楽者の風箱

No.40 2025.4

発行：日本聖公会北海道教区礼拝委員会

奏楽者会

「互いに詩と賛歌と霊の歌を唱え、主に向かって心から歌い、また賛美しなさい。」

(エフェソの信徒への手紙5章19節 聖書協会共同訳)

司祭 エリサベト 三浦千晴

現在聖マーガレット教会では、3名の奏楽者の皆さんが交代で、毎主日の礼拝の奏楽をご奉仕くださっています。皆さんそれぞれに仕事や役割をお持ちなので、担当日を決めるのもなかなか大変です。以前は、年に数回奏楽者会を開催して、各主日の担当者とその日の聖歌の選曲を話し合い、決めていました。でも最近では、奏楽者会を開けず、おもにスマホのグループラインを用いて、その作業を行っています。ライン上での奏楽者会は、とてもスマートで、粛々と事が進みます。それもまた、事柄の要件を満たすことであるとは思いますが、やはり顔と顔を合わせた奏楽者会では、もうすこし違った気づきや励ましが与えられます。時に個人的な話や、昔の教会生活の事に話が脱線していきませんが、むしろその中から奏楽者会としての新しいアイデアが与えられているのです。

例えば、聖マーガレット教会のオルガンは、ほぼ設立間もない頃から使用されている「ヤマハ5型」というリードオルガンです。とても音域が広く、重厚な音を作ることができます。でも足踏みであるため、体調の思わしくない時などは難儀するようです。ですから昨年、話し合っで電子オルガンを購入しました。たまにしか使用しませんが、今では曲想に合わせて使い分けてくださり、より豊かな奏楽になっているように思います。また、コロナ禍で制限されていた「声を出して歌う事」をお腹一杯味わうため、第2主日礼拝後に「ちょこっと聖歌タイム」を設定して、会衆の皆さんから希望のあった聖歌を一曲ずつ、短時間ではありますが、思う存分歌っています。これも奏楽者の皆様から提案されたアイデアです。

「聖公会の聖歌は、礼拝における賛美として生起され、発展してきたものであると同時に、個人的な体験や出来事による信仰表現、信仰告白から生まれてきたものでもあります。」(宮崎 光著『聖公会の聖歌 いのちを奏でよ』p25) このように聖歌は、神様にお捧げする賛美であると同時に、礼拝全体のメッセージを音と歌によって表すものでもあります。そしてそれは翻って、自らの奥深くにも染み入ってくるものであることを、私は自ら経験しています。だから皆さん、「さあ、主に向かって、喜び歌おう。救いの岩に喜びの声をあげよう。感謝のうちにそのみ前に進み賛美と共に喜びの声をあげよう。」(詩編95.1~2節聖書協会共同訳)ではありませんか！

多くの教会で奏楽を担ってくださる方が減っている昨今ですが、希望を失わず、出エジプト記15章に登場する女預言者ミリアムのように、タンバリンを手に持って、周りに集う人々と共に声を合わせて神様に感謝、賛美の歌を歌い続けていきたいと願っています。

音楽への思い～横山弥生さん聞く～

3月20日(木)八角堂*¹で横山弥生さん(札幌聖ミカエル教会信徒、シンガー)のトークショーとミニライブがありました。弥生さんのライブは他の会場でも何度か聴いた事がありましたが、八角堂の暖かく優しい木のぬくもりを感じる作りと大きな窓から見える白い雪、そして暖炉の炎と時折薪のはぜる音、全てが弥生さんの透き通るような柔らかい歌声にピッタリ合っていて、いつまでも聴いていたいライブでした。その弥生さんにお話を聞かせていただきました。

Q 弥生さんの歌う事への歩み(プロフィール)をお聞かせ願います。

A 昭和45年3月31日、江別で生まれました。小さい頃から歌が好きで、カセットテープに合わせて歌っていました。

高校2年生の時に第32回ポピュラーソングコンテスト北海道大会に応募し、ジュニア部門銀賞を受賞しましたが、進学をきっかけに長らく音楽活動から遠ざかりました。

卒業後に結婚し娘と息子を授かりましたが、離婚することになり、地元の江別市に戻りました。その後も仕事は続けていましたが、体調不良が続くなどして、平成24年から令和元年まで心療内科にも通いました。

現在の夫(北海道教区の聖職候補生候補で4月から聖公会神学院へ行かれる横山光紀さん)と再婚後、鬱症状はほとんどなくなっていました。知人に勧められて受けた知能検査の結果から、令和3年9月に若年性アルツハイマー型認知症との診断を受けました。悔いの残る人生にたくないという思いから音楽活動を再開し、令和4年3月に初めてのライブを開催。現在は毎月野幌のライブハウスでLIVEを実施しています。

Q 弥生さんにとって歌う事、歌い続ける事の意味や理由とはどんなものですか？

A 私にとって歌うことは、私自身を最も表現できるものであり、私ではない誰かの気持ちになれるものです。

Q 歌を通して伝えたいこと、メッセージがあればお願いします

A 病気を患い、出来なくなったり苦手になった事もあるのですが、神様が歌うことを残してくださった事に今はとても感謝しています。



歌に対する思い、小さい頃からとにかく歌が好きで、いつでもどこでも歌っているような子どもでした。学生時代が終わり、仕事についてからも、いつかはまた音楽を・・・と思っていましたが、まさかアルツハイマー型認知症という病気に背中を押されるように再開することになるとは思っていませんでした。

それでもやはり、音楽の活動を再開してみると、こんなにも歌が、音楽が好きだったんだと、何度も何度も思い知らされます。皆様と心を合わせられる時間になるよう、心を込めて歌っています。

Q 八角堂でお歌いになられた感想をお願いします。

A 火が入った八角堂は、外からの光とみなさんの笑顔も相まってとても暖かな空間でした。この素敵な場所をもっと多くの方に知っていただき、活用しないともったいない！とおもいました。

弥生さん、素敵な歌とメッセージをありがとうございました、また八角堂やいろいろな教会の聖堂で弥生さんの歌が聞きたい、たくさんの方に聞いてもらえたらと思いました。

(インタビュー・記事 鈴木かほる)



(編集者より)

*¹八角堂：北海道教区会館(北大病院そばの聖霊礼拝堂、教区事務所、主教邸がある建物)の中の文字通り八角形の集会室。旧北海道大学センター時代(1954-1983)のまま、クラシックなたたずまいを残しています。詳細は「北海の光」2月号(787号)、3月号(788号)をご覧ください。

クリスマスコンサート10回を重ねて

有珠聖公会 管理牧師 司祭ペテロ大町信也

有珠^{うす}聖公会では、クリスマスの間近にした時期に、クリスマスコンサートを開催し、回を重ねて昨年で10回を迎えました。各年度のプログラムは、下記の通りです。

- 2013年 【出演】オルガン(植松三千代)、オカリナ(永谷亮)、
 ハンドベル(シュタイナー学園いずみの学校)
- 2014年 【出演】ソプラノ(小貫多喜子)、オルガン(橋本めぐみ)
- 2015年 【出演】札幌ジュネス室内合奏団
- 2016年 【出演】オルガン(植木明美)
- 2017年 【出演】チェロ(土田英順)
- 2018年 【出演】ソプラノ(小貫多喜子)、ピアノ(島内美佐子・佐藤栄里子)
- 2019年 【出演】エス・クラリネット・クワイヤー in Sapporo
- 2022年 【出演】バイオリン(ニコイチヴァイオリン・齋藤真知亜・齋藤律子)
- 2023年 【出演】ヴォーカルアンサンブルグループ いぎない
- 2024年 【出演】薩摩琵琶(幽飴)

有珠聖公会では、それまで地域に向けて開かれたプログラムがなく、地域の人たちが教会を訪ねる事は、ほとんどありませんでした。地域の人々の認識は、丘の上に緑に囲まれてひっそりたたずむ石造りの文化財というものであったと思います。文化財にとどまらず今も生きて働く教会であることを伝え、教会に足を踏み入れてもらう可能性の一つとしてクリスマスコンサートが企画されました。



数少ない信徒の一人ひとりが地域の各所にポスターを張り、チラシを自宅近隣や友人に手配りし、当日は駐車場係や受付を担当したりと、すべてが信徒にとって初めてのことばかりでした。その結果、毎回約百名の方々が、礼拝堂を埋め尽くす町の恒例行事に育ちました。

有珠は、伊達市内の中心部から10キロほど離れており、戸数600戸ほどの高齢化の進んだ集落ですが、生の音楽や芸術に接する機会に飢えている方々が多くおられるという事を肌で感じています。そしてコンサートに来られた方が、クリスマスの礼拝に出席されるという事も多く経験しています。《伊達・有珠の地で潮と土の香りを大切にしながら、愛の香りを加える教会に！他教派や地域の人々の友となり、町の小さな宝となれる教会に！》という教会の夢を大切に、今後もこのプログラムを続けて行きたいと思います。

鐘をたずねて

—新札幌聖ニコラス教会—



新札幌聖ニコラス教会

新札幌聖ニコラス教会 下田 尊久

新札幌聖ニコラス教会のある厚別東地区は、50年前まで ^{しものっぽろ}下野幌 と呼ばれていた地域で新札幌駅の開業とともに徐々に住宅が増えた新興住宅地です。

1993年に ^{おおやち}大谷地 伝道所が新札幌パウロ病院の向かい側に定住して32年になります。今はありませんが、当時パウロ病院の隣にはカトリックの聖ベネディクト修道院がありお世話になりました。聖人の名前にちなんだ施設がある地域で、やがて教会の脇にはバス停も設置され便利になりました。夜になると尖塔にある十字架がライトアップ

され夜空にうかび、掲示板のあかりは歩く人の足元を照らしています。その尖塔の真下に小さなベストリーがあり、私たちの教会の鐘はここに吊るされています。この鐘の由来はわからないのですが毎主日の朝、ベストリーの小窓を開けて通りを行き交う人たちの耳にも届くようにと願いながら鐘を打ち鳴らします。そして、礼拝の始まりを待つ会衆は鐘の音を聞きながら心を整えます。鐘が鳴り終わり、聖歌番号が告げられてプロセッションが始まります。



祈禱書改正続行中



中学生の頃、学校の門で「新約聖書」が配布されていた。後に「ギデオン協会」の方々だと知るが、当時は多少困惑しながらも頂いた。当時、母が洗礼を受けた際、その後の信仰生活をどうしたらよいか尋ねた後、教父となっていた信徒から「詩編」を読んでいけばいい、と言われたということを聞いていた。しかし頂いた聖書にはその「詩編」が入っていなかった。なんだか焦り、覚えていないがどこかで小さな詩編だけが載った冊子を手に入れた。以降、聖書より詩編に親しんで手元に置いていた。

教役者となってからは、より親しみを感じている。説教や葬儀の中で分かち合うことが多い。新しい聖書が出ると、その詩編の言葉を比較し、その微妙さを楽しめる幸いを感じている。過日、某教会でのご奉仕の際、改正祈禱書の試用版として、「詩編」が用いられており、礼拝の中で用いられていることは、ただ単に目で文字を追っていることと違うことを改めて認識される新鮮な感覚だった。奉仕から帰り、お気に入りの139編を指と口で何度も反芻する。この度の改正では、聖書協会共同訳を基に、日本福音ルーテル教会との共同作業と聞く。かつての地域で共に働いたルーテル教会の同労者の顔を思い浮かべる。「講壇交換をしたな」と。

礼拝で、息を合わせて唱え合う、祈り合うこの行為がどんなに尊いことか、新しい賛美の言葉に静かに胸の鼓動が鳴る。
(司祭 グレゴリー松井新世)



編集者より

今号の原稿をいただいて、音楽の力ってすごい！と

感動。私自身を表現してくれて、周りの人をつないでくれて、教会と地域をつないでくれる。神様からいただいた音楽というプレゼントによって、私たちが日々生かされていることに、心から感謝。

今年の教区の宣教標語「愛はすべてを完成させるきずなです。」(コロサイ3:14b)に基づく今年の教区の聖歌は396番「わたしたちはひとつ」です。この曲にはまだ著作権があり、簡単にシンプルスコアを作成することができません。b4つで、弾けない!!と思っている方、半音下げると#一つで弾くことができます。(シドレーレミーミミレー・・・)。お試しあれ。

コロナ禍により、お休みしていた礼拝研修会を再開します(6月20~22日)。祈禱書改正について学び、試用版の式文を使って礼拝を奉げます。詳細は別刷りの研修会ご案内をご覧ください。みなさんのご参加をお待ちしています。

ニュース、質問等、皆さんの声をお待ちしています。

情報箱 投函先

郵便:040-0054 函館市元町 3-23 函館聖ヨハネ教会 教区礼拝音楽情報箱

FAX:0138-23-5656 (函館聖ヨハネ教会)

Eメール:e-k-maru@msb.ncv.ne.jp (丸山悦子)